

検査情報月報



横浜市衛生研究所

平成23年11月号 目次

【トピックス】

アレルギー物質を含む食品の検査結果(その2)	1
遺伝子組換え食品の検査	3
平成23年度 食品等の苦情品検査(4月～9月)	5

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成23年10月	10
-------------------------------	----

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報(平成23年10月分)	15
--------------------------------	----

アレルギー物質を含む食品の検査結果(その2)

平成13年4月、食物アレルギーを持つ人の健康危害を未然に防止する観点から、アレルギー物質(特定原材料)を含む食品に表示が義務付けられました。現在、特定原材料として卵、乳、小麦、そば、落花生、えび、かきの7品目が指定されています。

平成23年8月と9月に、健康福祉局食品専門監視班が市内小売店および製造所にて収去した特定原材料の表示のない食品について小麦とえび・かきの検査を行いました。また、平成23年9月に、各区福祉保健センターが小学校および保育所にて収去した特定原材料除去食について、卵と乳の検査を行いました。その検査結果を報告します。

1 小麦の検査

ベビーフード、穀類加工品、菓子類等を含む16検体について、小麦の検査を行いました。

ELISA法によるスクリーニング試験の結果、すべて陰性(10ppm未満)でした(表1)。

表1 小麦の検査結果(平成23年8月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
ベビーフード	6	0	0	0
穀類加工品	4	0	0	0
菓子類	3	0	0	0
食肉製品	1	0	0	0
めん類	1	0	0	0
調味料類	1	0	0	0
合計	16	0	0	0

2 えび・かきの検査

魚介類加工品、魚肉練り製品を含む8検体について、えび・かきの検査を行いました。

ELISA法によるスクリーニング試験の結果、ちりめんじゃこ1検体で陽性(10ppm以上)となりました。その他の7検体は陰性(10ppm未満)でした(表2)。

スクリーニング試験で陽性となったちりめんじゃこ1検体についてPCR法による確認試験を行ったところ、結果は陽性でした。この検体については、現在原因を調査中です。

表2 えび・かきの検査結果(平成23年8月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
魚介類加工品	7	1	1	1
魚肉練り製品	1	0	0	0
合計	8	1	1	1

3 乳の検査

乳除去給食3種類(ツナと野菜のスパゲティ、ゴーヤチャンプル、蒸しパン)8検体について、乳の検査を行いました。

ELISA法によるスクリーニング試験の結果、すべて陰性(10ppm未満)でした(表3)。

表3 乳の検査結果(平成23年9月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
ツナと野菜のスパゲティ	5	0	0	0
ゴーヤチャンプル	2	0	0	0
蒸しパン	1	0	0	0
合計	8	0	0	0

4 卵の検査

卵除去給食1種類(ゴーヤチャンプル)16検体について、卵の検査を行いました。

ELISA法によるスクリーニング試験の結果、すべて陰性(10ppm未満)でした(表4)。

表4 卵の検査結果(平成23年9月分)

食品	スクリーニング試験		確認試験	
	検体数	陽性数	検体数	陽性数
ゴーヤチャンプル	16	0	0	0
合計	16	0	0	0

※ ELISA法によるスクリーニング試験は、抗原抗体反応を利用して食品中に含まれる特定のタンパク質(アレルゲン)を検出する方法ですが、食品の加工度合いや使用原材料によっては、偽陽性となる場合があります。そのため、スクリーニング試験で陽性となった場合は確認試験を行っています。確認試験にはウェスタンブロット法とPCR法の2種類があります。卵、乳については、電気泳動によりタンパク質を分子量で分離して抗原抗体反応を行うウェスタンブロット法を、また、小麦、そば、落花生、えび、かにについては、特異的なDNA領域を増幅して検出するPCR法を用いて確認しています。

【 検査研究課 食品添加物担当 】

遺伝子組換え食品の検査

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、厚生労働省から公表されたものが国内で流通可能になります。検査は、承認済みのものについては定量検査(食品中に遺伝子組換え体がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行います。一方、未承認のものについては定性検査(食品中に遺伝子組換え体が含まれているかを調べる検査)を行います。

今回は、平成23年9月に、各区福祉保健センターが収去した計20検体について実施した遺伝子組換え食品の定量検査と定性検査の結果を報告します。

1 定量検査

豆腐10検体について、ラウンドアップ・レディー・大豆を検査しました。その結果、いずれも混入率は5%以下*1であり、違反検体はありませんでした(表1)。

表1 ラウンドアップ・レディー・大豆の検査結果

品名	原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
豆腐	日本	10	0

*1 承認済みの遺伝子組換え食品は、混入率が5%を超えると表示義務が生じます。一方、5%以下ならば表示義務はありません(ただし、書類等で確認ができること、かつ、意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります)。そのため、検査では混入率が5%を超えているかどうかを調べます。

2 定性検査

菓子類10検体についてBt10トウモロコシの定性検査を行いました。その結果、検知不能*2が1件ありましたが、その他はいずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表2)。

表2 Bt10トウモロコシの検査結果

品名	原産国	検体数	検知不能	検出数
菓子類	日本	10	1	0

*2 遺伝子組換え食品の検査では、組換え遺伝子とともに、その作物が固有に持つ遺伝子(内在性遺伝子)も同時に検査します。「検知不能」とは、本来検出されるべき内在性遺伝子が不検出であり、検査の判定ができない場合をいいます。この原因としては、加熱や加圧等の加工処理の途中で遺伝子が分解してしまうことが考えられます。

※ 今回検査した検査項目の解説は、次ページを参考にしてください。

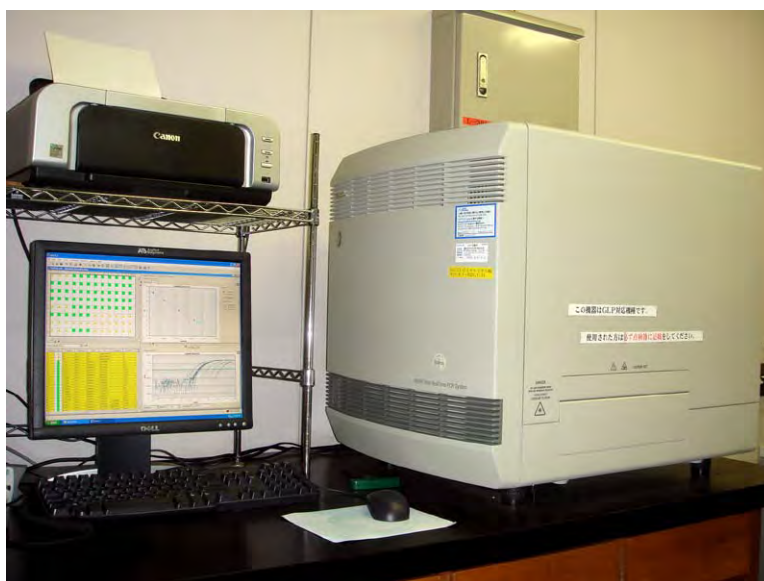
【解説】

○ ラウンドアップ・レディー・大豆

除草剤耐性を持つ遺伝子を組み込んだ大豆です。最も流通している遺伝子組換え大豆であり、アメリカなどで広く栽培されています。日本では、平成13年に安全性審査を経ています。大豆の定量検査としては、ラウンドアップ・レディー・大豆だけが国から検査法が示されています。

○ Bt10トウモロコシ

除草剤耐性と害虫抵抗性を持つ遺伝子を組み込んだトウモロコシです。アメリカで誤って栽培・流通し、アメリカ国内に広がったとされています。日本でも安全性審査を経ていないため、販売等が認められていません。



検査に使用している遺伝子を増幅させるための装置(リアルタイムPCR装置)

【 検査研究課 食品添加物担当 】




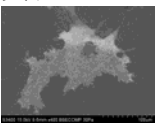
平成23年度 食品等の苦情品検査(4月～9月)

平成23年度上半期に、区福祉保健センターに届けられた食品等に関する苦情品の中で、原因究明のために食品添加物室で実施した理化学検査は、31件、41検体(残留農薬関連を除く)でした。そのうち、主な検体の検査結果は次のとおりです。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
植物 	庭で栽培していた里芋に似た植物を煮て食べたところ、痛みとしびれを感じて舌が腫れた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー シュウ酸 結果	長ねぎに似た形状の緑色の植物および里芋に似た白い植物の根。 白色針状結晶の固まりが多数認められた。 針状の結晶を認めた。 針状の結晶部分では主に炭素、酸素、カルシウムの元素を認めた。 緑色の植物部分から1,700 μg/g、白い植物の根部分から2,000 μg/gを検出した。 シュウ酸カルシウムが原因と推定された。
皿うどん中の異物 	店で喫食中、皿うどんのキャベツに昆虫の足様の異物が付着していた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 赤外分光分析 結果	長さ24mm、太さ0.2～0.8mm、重さ1mg、レの字状に折れ曲がった細長いこげ茶色の異物。 縦に走るスジ状模様を認めた。 表面は繊維状であり、断面に植物特有のハチの巣状構造を認めた。 セルロースに類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 植物の一部と推定された。
マンゴー 	皮をむいたところ、黒く変色していた。	外観 鏡検 pH 対照品との比較(GC/MS分析) 結果	全体的に黒ずんでいてやわらかく、中心部分まで変色が認められた。 果肉を薄切りし、拡大して観察したところ、対照品とは異なる茶色の部分を認めた。 苦情品:5.5(対照品:4.7) ジエチルエーテル抽出液について比較したところ、苦情品からエタノール170ppmを検出した。一方、対照品では不検出であった。 過熟による変色と推定された。
ソーセージマフィン中の異物 	パーティに練りこまれた形で毛髪様の異物が入っていた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 結果	長さ13mm、太さ0.15mm、黒色の毛様異物。異物はソーセージマフィンに埋め込まれた状態であった。 先端は両方とも白くなっており、片方には毛根が認められた。また、もう片方は針状に細くなっていた。 横行波状の小皮紋理(キューティクル)が認められた。また、断面には髓が認められ、髓指数は約30であった。 ブタまたはヒトの毛と推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
パン中の爪 様異物 	パンを食べたところ、爪の様な異物が出てきた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 赤外分光分析 ニンヒドリン反応 燃焼性 結果	大きさ18mm×2mm、重さ13mg。淡黄色の三日月状の薄片。なお、残品からは同様の異物は認められなかった。 表面は凸凹しており、裏面に細かいスジを多数認めた。 表面を拡大すると、薄い層が重なった構造を認めた。 炭素、酸素、窒素、イオウの元素を認めた。 爪と同様な赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性 加熱したところ、タンパク質が燃えたような臭いを発し、炭化した。 爪と推定された。
たけのこ水煮の袋	開封したら糞便臭がした。	官能検査 p-クレゾール スカトール 結果	5名で行ったところ、空袋は強烈な異臭を認めた。 490ppm 不検出 異臭の原因物質は、p-クレゾールと推定された。
ウインナー に付着した 異物 	髪の毛の様な異物が多数付着していた。	外観 鏡検 光学顕微鏡 電子顕微鏡 結果	1.0～1.5cm程度の数十本の黒～茶褐色の毛様の物質。スライスされたウインナーの表面に付着していた。 両端は切断されていて毛根はなし。太さは0.09～0.10mm。 髄が点状に連続してみられた。 横行波状の小皮紋理(キューティクル)がみられた。 人間の毛であると推定された。
シーチキン巻	スーパーで購入した細巻きを食べたところ、口の中で刺激を感じて吐き出した。	官能検査 酢酸エチル エタノール 酢酸 参考品 結果	残品の未食部分について、2名で官能検査を行ったところ、異味、異臭、刺激を認めなかった。 不検出 88ppm 560ppm スーパーに残っていた同ロット品について検査したところ、酢酸エチルおよびエタノールともに不検出、酢酸700ppmであった。 苦情品と参考品を比較した場合、異なる点はエタノールの有無であるが、この濃度が原因となるか不明であった。
ミネラルウォーター中の異物	埃っぽい臭気を感じ、中身を確認したところ白色の浮遊物が浮いていた。	外観 鏡検 光学顕微鏡 マイクロアナライザー 結果	不定形で大きさの異なる白色異物がミネラルウォーター中に多数浮遊しているのを認めた。 異物は白い薄膜を形成していた。 細かな粒子のかたまりを認めた。 主に炭素、酸素、窒素などの元素を認めた。 有機物のかたまりと推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
焼きそば中の異物 	給食で出された焼きそばに入っていた。	外観 鏡検 磁性 マイクロアナライザー 結果	長さ8.5mm×幅1.1～1.4mm、重さ115mg、銀色で半円状の金属様異物。 全体的に銀色で、所々表面が剥げ落ちていた。 磁性をわずかに認めた。 表面では、主にニッケルの元素が認められた。一方、剥げ落ちた部分では、鉛、銅、アンチモンなどの元素が認められた。 ニッケル、鉛、銅、アンチモンなどから成る金属片と推定された。
米飯中の異物 	給食の米飯中に混入していた。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 結果	3個の黒い固まり(2mm×3mm、2mm×3mm、1mm×1mm)が米粒に付着していた。 多数の様々な色をした細い繊維が、黒い汚れと共に固まりとなっていた。 からみあった多数の繊維を認めた。 炭素、酸素、窒素、硫黄などの元素を認めた。 多数の細い繊維が固まったものと推定された。
親子煮中の異物 	給食を喫食中に口の中から発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 リグニン(木質素)反応 結果	長さ7cmでV字状に折れ曲がった部分と、長さ0.5～1.5cmの3本の切れ端からなる淡黄色の繊維状物質。 細い繊維が寄り集まって太い繊維を形成していた。 断面に植物特有の網の目構造が見られた。 陽性 植物の繊維と推定された。
キムチ中の異物 	喫食中に口の中で固い感触がしたので取り出した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 赤外分光分析 リグニン(木質素)反応 結果	大きさの異なる微小な固まりを複数認めた。白色や淡黄色、赤色など色調の異なるものが混在していた。 表面に細かな凹凸を多数認めた。 多数の不定形の小さな構造を認めた。 炭素と酸素の元素を認めた。 セルロースと類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 陽性 植物の破片と推定された。
ベビーフード中の異物 	糸状の異物が出てきた。	外観 鏡検 赤外分光分析 結果	長さ約6cm、重さ1mg。肌色で細長くコシのある糸状の物質。 繊維状のものが束になっており、細かく規則的にねじれていた。 ポリエステルと同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 ポリエステルからなる糸と推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
仕出し弁当中の異物 	弁当中の蟹爪フライ喫食中に発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 磁性 溶解性 燃焼性 赤外分光分析 結果	大きさ1mm×3mm～4mm×6mm、重さ0.5mg～24mg。黒色の硬い固まり5個。 全体的に表面は黒色で光沢があり、凹凸が認められた。また、所々半透明で茶褐色な部分が認められた。 表面は比較的均一で、動植物に見られる特徴的な構造は見られなかった。 炭素と酸素の元素を認めた。 磁性は認めなかった。 水、ジエチルエーテル、クロロホルムに不溶であった。 炎で加熱したところ、プラスチックの焦げたような臭いを発したが、燃えにくかった。 アルキド樹脂に類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 熱硬化性樹脂の固まりと推定された。
メンチカツ中の異物 	メンチカツの内部から白い糸状の寄生虫のような異物が出てきた。	外観 鏡検 ニンヒドリン反応 赤外分光分析 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 結果	長さ5.5cm、重さ9mgの茶色い糸状物質。一端が涙滴状(4mm×2mm)になっており、引っ張ると弾力がありわずかに伸びた。 表面は比較的滑らかで、わずかに透けており糸状の部分は白っぽくなっていた。 陽性 肉の繊維と同様の赤外吸収スペクトルを認めた。 縦方向に多数の筋を認めた。 炭素、酸素、窒素を認めた。 タンパク質を主成分とする繊維と推定された。
冷凍餃子中の異物 	焼いて食べたところ、中から銅線のような異物が出てきた。	外観 鏡検 磁性 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 結果	長さ18mm×幅1mm×厚さ0.6mm、重さ0.16g。赤銅色で硬質な金属片が折れ曲がった状態。 幅と厚さが均一であり、両先端は尖っていた。 磁性を認めた。 表面は比較的滑らかであった。 鉄、銅、酸素、炭素の元素を認めた。 形状および組成から、段ボール等の留め金と推定された。
ミネラルウォーター中の異物 	自宅に設置しているウォーターサーバーから、白い異物が混入した水が出てきた。	外観 光学顕微鏡 マイクロアナライザー 結果	水が入ったPET容器の底に多数の非常に細かい白色異物が沈殿していた。 異物をメチレンブルーで染色したところ、青く染まった。異物の形状は綿様であった。 主に炭素、酸素、窒素の元素を認めた。 有機物の固まりと推定された。

品名	事故・苦情理由	試験項目	試験結果
オリーブとアンチョビの缶詰の沈殿物 	缶詰を開封し、自宅で瓶に小分けした。1日常温保管後に冷蔵保管したところ、液体が白濁した。	外観 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 溶解性 ニンヒドリン反応 ヨウ素デンプン反応 結果	瓶の底に白色沈殿物を多数認めた。 沈殿物をフィルターろ過後に観察したところ、酵母および桿菌を多数認めた。 炭素、酸素、窒素の元素を認めた。 塩酸、アンモニア水に不溶、エーテルに不溶であった。 陽性 陰性 白色沈殿物は、酵母および桿菌と推定された。
チャーシュー中の異物 	チャーシューをスライスして食べたところ、仮歯の様なものが出てきた。	外観 燃焼性 溶解性 赤外分光分析 結果	大きさ1.8cm×0.9cm、重さ0.287g。不定形で凹凸がある淡黄色のプラスチック様の固まり。 加熱したところ、プラスチック様の臭いを発した。 塩酸に不溶であった。 アクリル樹脂に類似した赤外吸収スペクトルを認めた。 アクリル樹脂の固まりと推定された。
パン中の異物 	給食のパンから黒い焦げ状物質を発見した。	外観 鏡検 電子顕微鏡 マイクロアナライザー 鉄分 燃焼性 結果	大きさ4.6mm×3.5mm、4.0mm×2.9mm、1.7mm×1.7mm、3個の重さの合計43mg。不定形で黒褐色の固まり。 マイクロスコープで観察したところ、表面には茶色、黒色、白色の部分が認められた。また表面は針で容易に削れ、力を加えると割れた。 表面に細かな凹凸を認めた。また断面に層の様な構造を認めた。 主に鉄と酸素の元素を認めた。 陽性 不燃性 鉄さびと推定された。
釜飯中の異物 	釜飯を食べたところ、歯に異物が当たり、それ以降歯に違和感(ザラツキ)がある。	外観 磁性 マイクロアナライザー 結果	直径2mm、重さ21mg、灰色の不定形の金属様の固まり。銀色に光っている部分がある。 磁性は認めなかった。 主に水銀、銀、スズ、銅の元素を認めた。 アマルガム(水銀と他の金属の合金)と推定された。

【 検査研究課 食品添加物担当 】

《今月のトピックス》

- マイコプラズマ肺炎の報告が増加しています。
- RS ウイルス感染症が例年より多く、今後の注意が必要です。
- インフルエンザが報告されはじめています。今後の動向に注意が必要です。
- 手足口病の流行は終息に向かっていますが、まだ3区で警報レベルです。

全数把握疾患

<細菌性赤痢>

Shigella flexneri 1件の報告がありました。ネパールでの感染が推定されています。

<腸管出血性大腸菌感染症>

2件の報告がありました(O165 VT2、O157 VT1VT2)。腸管出血性大腸菌の食中毒を予防するためには、肉の中心部まで十分に加熱することが重要です。また、焼肉やバーベキュー等、自分で肉を焼きながら食べる場合も、十分加熱し、生焼けのまま食べないようにしましょう。特に、若齢者、高齢者、抵抗力が弱い方は、重症化することがありますので、生肉や加熱不十分な肉料理を食べないことが重要です。

◆啓発用チラシ「O157に注意しましょう」<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

◆家庭でできる食中毒予防のポイント(動画)<http://www.youtube.com/watch?v=TI03jn2EibU>

<デング熱>

1件の報告がありました。フィリピン(マニラ)での感染です。デングウイルスに感染した場合、かなりの確率で不顕性感染になると考えられていますが、実際、感染者がどの程度不顕性感染となるかはわかっていません。デング熱の症状は、感染4～6日後、突然の発熱で始まり、頭痛、特に眼窩痛、筋肉痛、関節痛を伴うことが多く、食欲不振、腹痛、便秘を伴うこともあります。発熱のパターンは二相性になることが多いです。発症後、3～4日後より胸部・体幹から始まる発疹が出現し、四肢・顔面へ広がります。これらの症状は1週間程度で消失し、通常、後遺症なく回復します。また、デングウイルス感染後、デング熱とほぼ同様に発症し経過した患者の一部において突然、血漿漏出と出血傾向を主症状とするデング出血熱とすることがあります。重篤な症状は、発熱が終わり平熱に戻りかけたときに起こることが特徴的です。デング出血熱の致死率は国により数パーセントから0.3%と異なります。2007～2010年に国内でデング熱と診断された患者はすべて渡航先での感染であり、東南アジアを中心としたアジア諸国が9割を占め、特に2010年はインドネシア(79例中51例はバリ島と記載有り)、インド、フィリピン、タイへ渡航して感染した例が多く報告されました。デングウイルスはネッタイシマカやヒトスジシマカの刺咬により人→蚊→人で感染環が成立します。前者は都市部に生息する蚊であり、後者は都市部と郊外の両方に生息します。ネッタイシマカは、日本では、南西諸島で昔生息していましたが、現在は生息が確認されていません。なお、日本でもヒトスジシマカは生息しており、今後、媒介する可能性も否定できません。実用化されたワクチンは無く、対症療法が中心です。患者の渡航歴等の問診が重要です。

◆デング熱・デング出血熱について<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/dengue1.html>

◆デング熱http://idsc.nih.gov/idwr/kansen/k04/k04_50/k04_50.html

<レジオネラ症>

肺炎型1件、ポンティアック型1件の報告がありました。どちらも感染経路等調査中です。

<アメーバ赤痢>

腸管アメーバ症2件の報告がありました。1件は日本国内での異性間性的接触、もう1件は感染経路、地域等不明でした。

<後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)>

3件の無症候期の報告がありました。すべて国内での同性間性的接触でした。

<クロイツフェルト・ヤコブ病>

1件の古典型クロイツフェルト・ヤコブ病の報告がありました。

<バンコマイシン耐性腸球菌感染症>

1件の報告がありました。VanCで、感染経路、地域等不明です。

※各感染症については、横浜市衛生研究所HPをご参考ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握疾患

平成23年9月19日から10月23日まで(平成23年第38週から第42週まで。ただし、性感染症については平成23年9月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

第38週	9月19日～25日
第39週	9月26日～10月2日
第40週	10月3日～9日
第41週	10月10日～16日
第42週	10月17日～23日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

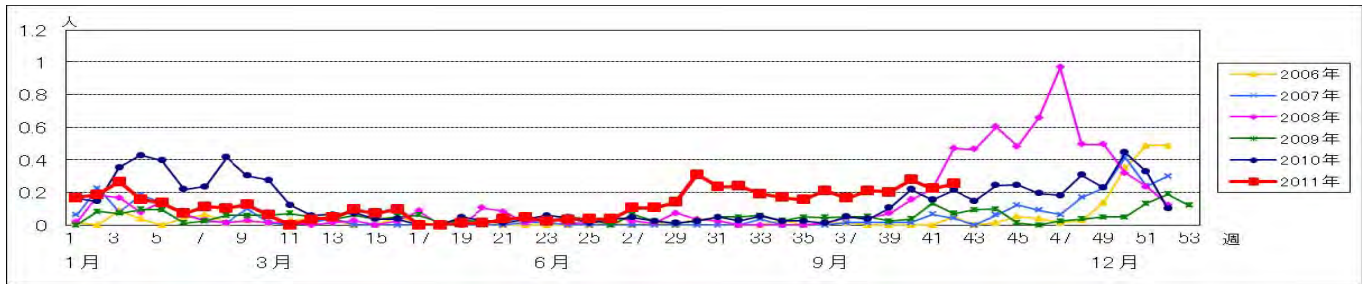
<インフルエンザ>

今シーズンに入り、市内では定点から第38週に1件、41週に2件、42週に3件報告されています。いずれも迅速キットでA型が陽性でした。第36週に市内の通所型障害者福祉施設でインフルエンザA型と診断された患者が複数保健所に報告されました。そのうち、5名の患者から検体を採取し、インフルエンザウイルスの検索を行ったところ、Real-time RT-PCR法による遺伝子検出では5名全員からAH3亜型ウイルスのHA遺伝子が検出され、分離培養検査では4名からAH3N2ウイルスが分離されました。ポストパンデミックに入った2010/11シーズンはAH1N1pdm09、AH3亜型、B型ウイルスの混合流行であり、この夏の南半球(夏季)でも3種類のウイルスが混在しています。南半球の流行状況はその後の北半球での流行状況の参考となることから、国内でも今シーズンも多様なウイルスの流行が予想されます。

◆横浜市内で発生したAH3亜型インフルエンザによる2011/12シーズンの集団かぜ初発事例 <http://idsc.nih.gov/iasr/rapid/pr3812.html>

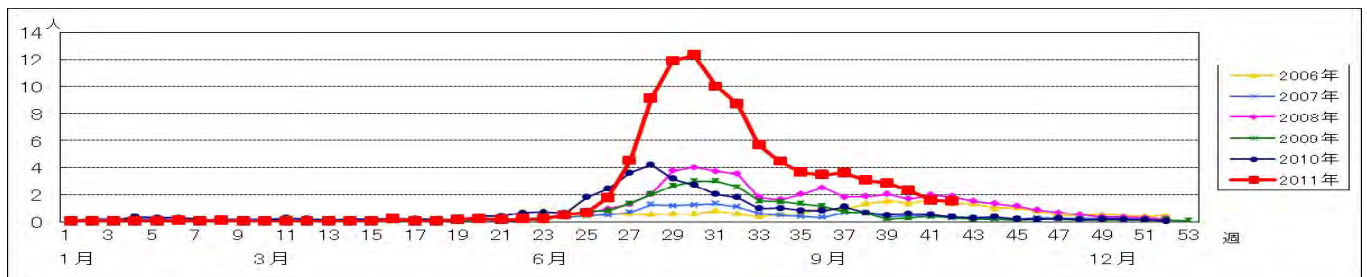
<RSウイルス感染症>

例年冬にかけて流行しますが、今年は全国的に例年より増加しています。横浜市でも、30週あたりから定点あたり0.20を超えており、例年より多い状態が続いているため、今後の注意が必要です。



<手足口病>

16年ぶりとなる横浜市内の大流行も、第42週では市全体で1.48とほぼ終息となりました。しかし、磯子区3.00、泉区5.33、瀬谷区4.00と、まだ3区で警報レベルです。



今年主流となったCA6による手足口病では、罹患1~2か月後の爪甲脱落症も報告^{1),2)}されているので、引き続き注意が必要です。

1) 浅井俊弥. 手足口病に続発した爪甲脱落症. 皮膚病診療 2011;33(3):237-240.

2) IDWR 第28号<注目すべき感染症> <http://idsc.nih.gov.jp/idwr/kanja/idwr/idwr2011/idwr2011-28.pdf>

<伝染性紅斑>

42週では中区3.00で警報レベルですが、市全体では、0.14と落ち着いています。

<百日咳>

42週では中区1.50で警報レベルですが、市全体では、0.05と落ち着いています。

<性感染症>

9月では、性器クラミジア感染症は男性が29件、女性が18件でした。性器ヘルペス感染症は男性が5件、女性が6件です。尖圭コンジローマは男性9件、女性が3件でした。淋菌感染症は男性が19件、女性が1件でした。

<基幹定点週報>

マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。全国では、例年定点あたり0.2~0.6程度で推移していましたが、42週では1.13と増加しています。横浜市でも39週では定点あたり2.33、40週0.00、41週1.67、42週1.67と、昨年の39週0.33、40週0.67、41週0.00、42週0.00を上回っています。9月は無菌性髄膜炎、細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報>

9月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症9件で、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

<ウイルス検査>

10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点42件(鼻咽頭ぬぐい液41件、ふん便1件)、内科定点1件、基幹定点13件(鼻咽頭ぬぐい液7件、髄液6件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気管支炎17人、上気道炎16人、発疹症7人、胃腸炎2人、内科定点は上気道炎1人、基幹定点は不明熱2人(5検体)、髄膜炎2人(3検体)、上気道炎2人(3検体)、リンパ節炎2人でした。

11月9日現在、小児科定点の発疹症患者3人からコクサッキーウイルス(Cox)A16型、気管支炎患者1人からインフルエンザウイルス(Inf)AH3型、上気道炎患者1人からヘルペスウイルス1型、胃腸炎患者1人からワクチン由来のポリオウイルス1型、基幹定点の上気道炎患者1人からInf AH3型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の気管支炎患者3人からRSウイルス、上気道炎患者3人と気管支炎患者3人からライノウイルス、上気道炎患者1人からCoxA6型、上気道炎患者1人からアデノウイルス3型、内科定点の上気道炎患者1人からInf AH3型、基幹定点の髄膜炎患者1人からエコーウイルス6型、不明熱患者1人からCoxA 10型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

10月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点から3検体、基幹定点から菌株受付が12件、定点以外の医療機関等からは11件あり、赤痢菌、腸管出血性大腸菌、腸管毒素原性大腸菌、腸管凝集性大腸菌、サルモネラ、NAGビブリオが検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点から5件で、A群溶血性レンサ球菌が3件検出されました。定点以外の医療機関等からは16件で、*Legionella pneumophila* が2件検出されました。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(10月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	10月			2011年1月～10月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌			1		3	8
腸管病原性大腸菌					7	
腸管出血性大腸菌		1	6		1	46
腸管毒素原性大腸菌		1			5	
腸管凝集性大腸菌		1			1	
パラチフス A 菌					3	
サルモネラ	1		2	2	16	11
カンピロバクター						3
黄色ブドウ球菌					1	2
コレラ菌						2
NAG ビブリオ			2			2
クロストリジウム						1
不検出	2	9	0	7	71	5

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	10月			2011年1月～10月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌 T1				7		
T3				4		
T4				4		
T12	1			9		
T25				2		
T28				4**		1
T B3264	2			12		
型別不能				2		
B群溶血性レンサ球菌						12
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		1			6	16
バンコマイシン耐性腸球菌						15
<i>Achinomyces</i>						1
<i>Branhamella</i>				1**		
<i>Legionella pneumophila</i>			2			9
インフルエンザ菌				9**		
肺炎球菌				5**		
<i>Arcanobacterium haemolyticum</i>		1			1	
<i>Campylobacter fetus</i>		1			1	
不検出	2	0	14	14	2	43

* : 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

** : 同一検体から複数菌検出

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成23年9月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成23年10月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成23年9月のアクセス件数、アクセス順位及び平成23年10月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成23年9月)

平成23年9月の総アクセス数は、216,329件でした。主な内訳は、感染症70.9%、食品衛生8.6%、保健情報6.8%、検査情報月報4.6%、生活環境衛生2.0%、薬事0.8%でした。

(2) アクセス順位 (平成23年9月)

9月のアクセス順位(表1)は、第1位が「マイコプラズマ肺炎について」、第2位が「手足口病について」、第3位が「衛生研究所トップページ」でした。

第1位は、「マイコプラズマ肺炎について」でした。

マイコプラズマ肺炎は、年間を通じて常にアクセス件数が多く、毎月上位にランクインしています。国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマ肺炎の定点当たり報告数は、第25週(6月20～26日)以降は過去5年間の同時期と比較して最も多い報告が続いており、第39週(9月26日～10月2日)は 0.97と、高い水準で推移しています。

第2位は、「手足口病について」でした。手足口病(hand,foot,and mouth disease:HFMD)は、口腔粘膜及び手や足等に現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス性感染症であり、乳幼児を中心に主に夏季に流行する疾患です。国立感染症情報センターの報告によりますと、手足口病の定点当たり報告数は、第36週(9月5日～11日)以降減少が続いており、終息に向かっていますが、第39週(9月26日～10月2日)は 2.57と、過去5年間の同時期と比較してかなり多い報告が続いています。

第3位は、衛生研究所トップページでした。

第4位は、「ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について」でした。本市では、ポリオの予防接種(定期接

表1 平成23年9月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	マイコプラズマ肺炎について	49,440
2	手足口病について	7,443
3	衛生研究所トップページ	4,722
4	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	4,096
5	RSウイルスによる気道感染症およびパルピズマブ(シナジス)について	3,265
6	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,644
7	サイトメガロウイルス感染症について	2,213
8	クロストリジウム・ディフィシル感染症	2,112
9	感染症情報センター	2,051
10	サルモネラ感染症(食中毒)について	1,723

データ提供:総務局IT活用推進課

種)を1年に2回、春と秋(4月と10月)に行政区の福祉保健センターで実施しています。10月の定期接種の前であること、また9月7日付けの一部の新聞で不活化ポリオワクチンについて報道がなされたことが、アクセス件数の増加の一因ではないかと思われます。

現在、厚生労働省で不活化ポリオワクチンの導入に向けた取り組みが進められていますが、国内での導入は、早くても2012(平成24)年度の終わり頃の予定とのことです。不活化ワクチンが導入されるまで、ワクチンを接種せずに様子を見る人が増えると、免疫を持たない人が増え、国内でポリオの流行が起こってしまう危険性があります。ポリオワクチンを接種することが、ポリオを予防する唯一の方法です。

厚生労働省のポリオワクチンのホームページ <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/index.html>

保護者向けのリーフレット http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/dl/polio_vaccine.pdf

第5位は、「RSウイルスによる気道感染症およびパリビズマブ(シナジス)」でした。RSウイルス感染症(respiratory syncytial virus infection)は、病原体であるRSウイルスが感染者の鼻汁、喀痰などから接触感染あるいは飛沫感染により伝播する呼吸器感染症です。年齢を問わず生涯にわたり顕性感染を繰り返し、生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の児がRSウイルスの初感染を受けるとされていますが、終生免疫は獲得されません。特に生後数週間～数か月間の時期に母体からの移行免疫が存在するにもかかわらず、下気道の炎症を中心とした重篤な症状を引き起こします。国立感染症情報センターの報告によりますと、2004年以降の同時期の報告数としては、最も多い状態が第16週(4月18日～24日)以降継続しています。

(3) 電子メールによる問い合わせ (平成23年10月)

平成23年10月の問い合わせは、5件でした(表2)。

表2 平成23年10月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
猫の死体処理について	1	感染症・疫学情報課
IgG抗体価の判定基準について	1	感染症・疫学情報課
抗体検査の受診について	1	感染症・疫学情報課
ポリオ生ワクチンについて	1	感染症・疫学情報課
保育園のアタマシラミについて	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事 (平成23年10月)

平成23年10月に追加・更新した主な記事は、3件でした(表3)。

表3 平成23年10月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
10月 6日	感染症に気をつけよう(10月号)	追加
10月 7日	熱中症情報	更新
10月11日	英字略語集	更新